

SDGs 国連が2030年までに解決を目指す持続可能な17の開発目標。本稿に書かれた目標は「すべての人に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する」。

いわきおてんよUSUN

企業組合事務局長

島村守彦さん



登山家の栗城史多のぶかず

さんが五月二十一日、エベレストで亡

くなりました。享年三十五歳。エベレストのあるネパールは二〇一五年に大震災がありました。東日本大震災の経験があった福島県の子供たちは当時、ネパールの被災地に明かりを届けたいという思いを抱き、栗城さんはその実現に向け、現地での活動を支援してくれました。

その栗城さんがエベレスト登頂

ネパールの子に希望の灯

に向けて日本を出発した翌日の四月十八日、私たちも後を追うようにネパールに入りました。

ネパールの被災地四カ所にある学校に届けるために準備した荷物は、膨大な量でした。いわきの子供たちと活動を支援する皆さんが作った太陽光パネル四十枚、手作りでできるソーラーLEDキット百



ソーラーLEDランプを手にするチエパン族の子どもたち。ネパールで

五十セット、段ボール七箱分の文房具、寄贈されたノートパソコン八台、子供用Tシャツなど。

最初に訪問した小学校は、村の入り口から六時間も山を登らねばならなかった。道のりは険しく、滑落してけがをしたり、体調を壊すメンバーもあり、地元の人に助けられながら苦労して到着しました。村は山岳少数民族チエパン族が暮らし、百十五人の子供たちが学校に通っていました。

電気も水道もない村で、光と音楽を届けるイベント「HIKARI I SONG GIFT」を開催しました。山中にある小さな学校

で、子供たちとソーラーLEDランプを製作し、完成したころには日も落ち村は真っ暗でした。自分たちが作った初めての明かりを手にした子供たちは誇らしげ。その明かりを頼りに闇の中を帰宅していきました。真っ暗な山中を小さな明かりが並んで登っていく。次第に枝分かれし、子供たちが帰宅してその明かりの動きが止まるまで、私たちは感動で涙が止まりませんでした。

東日本大震災から七年が経過し、薄れていく記憶。小さな明かりに涙し、希望を感じたあの時の思いがよみがえる瞬間でした。栗城さんがつないだ縁は福島の子供たちにチャレンジする勇氣と意義、ネパールの子供たちには希望の灯をともっています。

※この連載は、NPO法人JKSKによる『結結プロジェクト』の協力を得ています。